

議事録概要

1 平成28年度モニタリング調査の結果について

- 佐々木委員 コンテナ苗とは具体的にどういったものか。また、活着率の向上を考えると100%活用できるものか。
- 和田委員 コンテナ苗は穴の開いたプラスチック容器に種や実生苗を入れて作る方法で苗畑の育苗方法とは異なる。スギやマツの例では、植栽時期が広がり活着が良いが、ブナはまだ検証していないためうまくいけば使用できる。
- 会長 試験的にはやってみた方がいい提案だと思う。国有林では現在使用されているものか。
- 仙北谷代理 スギやマツのコンテナ苗は裸苗に比べコストがかかるため、国有林では育苗している苗畑が少ない状況である。東北地方の海岸林植栽ではコンテナ苗の使用が増えてきている。育苗コストが下がれば今後増えるだろう。広葉樹の使用実績はなし。
- 福森委員 雪害について、植栽木がススキにより凍害の被害から守られているイメージがあったが、ススキの下敷きになって折れたものなのか。
- 和田委員 凍害から守られているプラスの効果もあると思うが、モニタリングでは完全に折れたものの被害状態から判断した。春先の調査では、共倒れしているケースが多い感じがする。
- 青木委員 形質を求めるスギ人工林と異なり、広葉樹の場合は部分的損傷でも根が活着していれば再生力があり自然に成長する。被害の中身がポイントになるのでは。
- 和田委員 主軸折れは重傷レベルで枝折れは軽傷レベルで色分けしている。獣害であれば主軸の樹皮被害は比較的重傷の被害。雪害であれば主軸折れや根返りが重傷の被害に区分している。ブナは耐陰性がありススキの下でも割と生存する。
- 会長 全ての植栽木を生かすことは困難なこと。樹高成長があればそんなに枯死率が高まっていないことから、神経質になる時期は脱したのではないかと思う。

2 平成28年度事業の実績について

- 会長 補植した場所は生育条件の悪い所のようなが、植栽前の生存状況はどうであったものか。
- 事務局 H25植えの列状植栽地は、ブナとヤマハンノキの交互植えを行った箇所ですスキにブナが埋もれて成長が殆どなくその内約3割が枯損。H21植えの島状植栽地は、全面がススキに覆われ島内で約8割が枯損していた。
- 会長 当時、土壌条件の悪い所を耕耘したことによりススキが一面に増えたと思うが、植栽木が生存している状態であればそのままでも良いのでは。

- 青木委員 ウダイカンバなどの実生が出てきて成長していく可能性があれば、土壌条件の悪い場所は耐性の高い樹種を優先させる考えもある。
- 会長 ウダイカンバの種子は小さく落ち葉が積もると芽生えてこない。刈り払い等で表面の土壌条件を変えたときにチャンスと言える。
- 和田委員 当地は牧場跡地への植栽であるが、中にはススキが生えないくらい土壌条件の悪い場所にも植栽してきた経緯がある。
- 高松委員 森林を保つのであれば土壌条件が悪い場所でも生育可能なハンノキの植栽も選択肢の一つ。ブナを活着させるため黒土をもっと大量に入れたらどうか。
- 和田委員 列状植栽地にはその考え方でヤマハンノキが植栽されている。黒土はベストだが広大な面積に植栽するとなるとその分のコストがかかる。
- 青木委員 ササの侵入により森林の管理が不可能になることが一番怖い。ササが中心部に達する前にブナなどが生育できれば事業の目的としてよいのでは。
- 会長 広大なこの範囲を再生させるには、すぐに回復する場所と気長に待つ場所という見極めをしていく方がいいのかもしれない。今回の事業箇所の記録を残し、その成果を見ながら今後のやり方を考えていければと思う。
- 会長 自然環境学習は課題が多いと思うが、事業に関わらず最近の利用者の動向など如何なものか。
- 村田委員 学校行事として郷の学校を何校かあたり呼びかけているものの、移動に往復2時間かかるため難しい現状。学校が休みの日を狙って、子供達を森に連れて行き観察会や植樹活動を行っている。団体の事業では夏にキャンプをする利用者と森で遊びながら将来の子供達のために森をつくろうという活動を継続している。来年度は北秋田市教育委員会のバスを1回借りる予定。
- 青木委員 環境教育的な事業は皆片手間の中で行っているため現実問題としてなかなか難しい。例えば、植樹用の苗木は苗畑のある県が管理し提供することとし、環境教育はスタッフが充実している環境省が行うといった形でお互いの強みを生かし連携していければ良いのでは。
- 村田委員 協議会の自然環境学習は環境省のイベント情報にある事業で、観察会等の参加者に植樹を行ってもらう活動を年に3、4回実施している。今年度は事情があり1回の実施であったが、新年度は今のところ2回計画されている。
- 小笠原オブザーバー 環境省の土地も植樹場所として活用できるため、県とも連携していきたい。現地に人を連れて行くことは難しいため、皆で協力してやっていきたい。
- 佐々木委員 一般の方の関心を引きつけることが大事。初めて森吉に行った人達でも結構興味を持ってきている。色々なパッケージを作りマスコミの力も借りながら、町内会や商工会議所などにも呼びかけていかないと広がり難しいと感じる。ここで出来る連携はして、周知を図る方法をとっていく必要がある。
- 常富委員 9月に自然再生パネル展を拝見したが、この自然再生の取組が来場者に伝わる

かどうかを考える必要がある。また、現地ではターゲットを絞り込んで、特にここは一般の方にも見ていただくといった形のものが必要である。環境省としても、連携して全体的に面白いイベントにもっていければと感じた。

会長 ターゲットというのは両方必要なこと。この地域の歴史と文化を知ってもらうためには地域の子供達、広く関心を集めるためには秋田市が中心となる。いずれも移動にはバスを利用することになるが、予算的な面もありなかなか実行できないことが協議会の悩みごとでもある。

3 自然再生専門家会議について

村田委員 意見交換会の中でコンテナ苗による育苗も検討していきたいとあるが、県ではこれを進めていくものか。準備があるため早めに知りたい。

事務局 ポット苗はそのまま使うこととし、コンテナ苗を試験的に行う考え。

和田委員 コンテナ苗は先にセンターで検証した上で判断することになる。良ければ、ボランティア植樹用でも育苗が可能になると思う。

青木委員 ボランティアでポット苗を植えている場所は、枯死率が他の地域に比べて特に高い訳でもないため現状のままでもよいのでは。

会長 多分、秋田県はブナに適した場所でポット苗であっても活着が良いのだと思う。コンテナ苗は季節性を問わない点もあるので試してみても悪くはない。どうやって作ってどの位の手間がかかるのか比べてみることも良いのでは。

4 平成29年度事業の計画について

会長 現状をおさえることが大事で調査に時間をかけていただき、事業を計画していただきたい。環境学習も課題が沢山ある中で、どの様に進めていくべきか。

村田委員 お金をかけないでやる方法もあるため、委員の皆さんの協力もいただきたい。北秋田市のバスが老人クラブや学校を対象に使えないものか。

石崎代理 検討します。

九嶋委員 学校生徒を対象とした場合や市が主催している団体に対して貸し出す場合があるため、日程が分かれば早めに相談していただきたい。

青木委員 当面は細々とやっていくことになるが、植樹場所を提供できるという利点があるので、経済団体や北秋田市商工会などと連携を図っていく方法もある。

会長 事業を始めて10年経ち、環境教育的な面が強まってきているのがこの協議会の流れ。地元にとっての「森吉」を無くさない意味でも、これからの世代である子供達に対する働きかけが重要。北秋田市さんにも協力をお願いしたい。

村田委員 提案として、老人クラブなどの団体に呼びかけて現実味を帯びた場合は、事務

事務局 局に話を持っていけばよいものか。
協議会名の申請や通知があれば事務局で対応。市や団体との事前調整は村田委員にお願いしたい。

会長 事務局経由で連絡を密にとることとし、募集も含めて皆さんとも相談しながら何か新しい動きを作れればと思う。

5 その他

常富委員 環境省が行う事業について、報告させていただきたい。

小笠原オブザーバー 明日、森吉山野生鳥獣センター運営協議会幹事会があり、その場で2017のイベント（案）を話し合う予定。パンフレットには6月から11月までのイベント情報が載っており自然再生協議会と連携したイベントもあるので後日ご覧いただきたい。印刷は5月の総会終了後を予定し、配布は北秋田市全戸、観光施設や公的な施設に置いて周知する予定。

福森委員 協議事項で話のあった補植はポット苗を使用する場合夏場でもよいものか。下刈りも繁茂を減らすため夏場がよいか、雪害対策のため秋がよいものか。

事務局 補植用の苗木はセンターの裸苗となるため、秋口を予定している。今回事業で行った下刈りは初めて実施したため、来春状況を確認したい。

会長 雪害は和田委員の方でもある程度状況を見ていただきたい。

和田委員 苗木のサイズや太さが関係すると思うため、その辺が明らかになれば分かる。

会長 この件についても、関係者で連絡を取り合って実施していただきたい。